

国  
語

二〇二二年度

東京純心女子高等学校入学試験問題

〔一般入学試験〕

特進プログラム&特待生選抜を兼ねる

- 一. 解答は解答用紙に記入せよ。
- 二. 記述問題で字数制限のある場合は、句読点・記号も一字として数えよ。
- 三. 問題文は上下二段になっている。

① 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

◇人生……麻生人生。東京で引きこもり生活をしてきた二十四歳。両親の離婚後、

母と二人で暮らしていたが、母が家を出て行ってしまったため、わずかな手がかりをもとに、子供の頃に大好きだった祖母を訪ねて、たてしな 蓼科に向かう。そこで認知症を患っている「ばあちゃん」と十数年ぶりに再会した。

◇ばあちゃん……マーサ（中村真朝）。蓼科に住む、「人生」の父方の祖母。

◇つぼみ……中村つぼみ。人生が蓼科に来る少し前から「ばあちゃん」と暮らしていた、二十一歳。母の再婚相手が「人生」の父親にあたる。母と、義理の父親（人生）の父親）を昨年亡くした。

◇志乃……駅前で食堂を営む、「ばあちゃん」の旧知の友人。

◇田端……人生が清掃の仕事をしている「青峰寮」の介護士長。

「人生」は、つぼみや志乃、田端と協力し、「ばあちゃん」の大好きだった「自然の田んぼ」での米作りを手伝い始めようとしていた。しかし、その矢先、「ばあちゃん」の認知症が一気に進行した。「人生」は、「ばあちゃんの作ってくれるおにぎりがもう一度食べたい。自分で作ったお米で、ばあちゃんにおにぎりを作ってあげたい」という一心で、志乃さんの指導のもと、米作りに取りかかることを決意した。

次の場面は、「自然の田んぼ」での月ごとの作業について、志乃さんに話を聞いているところから始まる。

そして、十月。ついに、稲刈りのときを迎える。

①その年の気候にもよるが、豊作の年は黄金色の稲田が目にも鮮やかに美

しく輝く。いちめんに実った棚田の風景は、まさに圧巻だ。

通常であれば、稲刈り機で効率よく刈り取って、みるみるうちに田んぼを裸にしていく。が、ばあちゃんの田んぼは②そうはいかない。最後まで手作業が③原則なのだ。カマで刈り取り、束にして、稲木と呼ばれる木製の棚に穂を下にして掛けていく。これを「稲架かけ」という。

「それ、見たことある。ふさふさの、ちっちゃい屋根みたいなのですよ？」

つぼみが言うと、志乃さんが、「そ。これがふさふさじゃないと、農家の人は悲しいわけ」と言った。稲が実らなければ、すかすかになるのだから。

「この稲架かけの瞬間が、毎年、いちばん嬉しい瞬間ね。ああ、今年も実ってくれた、ほんとによかった、ありがとうってね」

志乃さんがしみじみと言う。「ありがとうって、誰に言うんすか」と人生が訊くと、

「決まってるでしょ、④」  
「④」によ。実ってくれてありがとう、ってね。自然とそういう気持ちになっちゃうんだな、これが」

志乃さんの答えに、「ああ、それはよくわかるなあ」と田端さんが相槌を打った。

「なんだか、無性にありがたい気分になるんだよ。ほかの野菜の収穫のときでも、もちろんそうなんだけど……やっぱ、お米は特別だね。生きてる証しっていうか。自然と、命と、自分たちと。みんな引ってくるめて、生きるばかり。そんな気分になるんだ」

へえ、と人生は思わず声を漏らした。

生きるばかり。なんだかヘンテコだけど、そうとしか言いようのないフレーズ。その言葉が、ふっと手を伸ばして、人生の心の表面にそっと触れた気がした。

「そうね。みんなで生きてるって感じ。マーサさんの田んぼは、耕さないし農薬も使わないから、ミミズやカエルやゲンゴロウとか、生き物がたくさん棲息してるの。ちゃんんと食物連鎖が起こって、命のリサイクルがあつてね。みんなで手を結び合って生きてる感じが、いつそうするのよね」

ふむ、と田端さんが、⑤感じ入ったように鼻を鳴らした。

「雑草や害虫を殺さず、むしろ自然の食物連鎖や、生存競争に任せるっていう考え方なんだね。ユニークだなあ」

「普通はそんなふうにはできないね。手間がかかるのに収穫は少ない。商業的には成立しないわよ。マーサさんも、それは百も承知だったの」

(中略)

実った稲穂を十分に天日に干した後、脱穀をする。最近では、稲刈り機で刈り取りながら脱穀もしてしまうスピードイナやり方が主流だが、ばあちゃんとは別。昔ながらの足踏み脱穀機で、稲から籾をこそぎ落とす。さらに、籾に混じったわらやゴミを吹き飛ばす「とうみ」という機械——機械といってもかなり原始的なものだと志乃さんは強調した——にかけて、籾だけを選別する。

「で、最後に、籾すり機にかけて玄米にする。さらには精米機にかけて、白米にする。お米の状態になったら、水で洗って、お釜で炊いて、ようやくで

き上がり、つてわけ」

(中略)

それにしても、なんと手間ひまのかかる作業なのだ、米作りとは、「これは、よっぽど心してかからなきゃならんね」人生が思っていることを、そのまま、田端さんが口にした。

人生とつぼみ、ふたりの米作りへの挑戦は、こうして始まった。

(中略)

桜のつぼみが徐々に膨らみ、ようやく花開いた頃が、苗床作りに適した時期なのだ、と志乃さんが教えてくれた。このあたりでは、東京よりも当然開花が遅く、四月下旬くらいにようやく咲く。それをサインに、苗床を田んぼの一角に作るのだ。

桜が咲いて、新しい生命がいつせいに息吹くこの時期に、お米の赤ちゃんも誕生するのよね。志乃さんにそう言われて、人生は、本当にお米の揺りかごを作るような気分かられた。

(中略)

そして迎えた、苗床作りの日。長い冬を越してきた、⑥養分がたつぷりと蓄えられたふかふかの土。それをクワでならして、種籾をまく。その上に土を被せ、寒い中足踏みしながらみんなで作った籾殻燻炭をまく。

耕さず、肥料も施さない土だけれど、前回の刈り入れが終わったあとにまいておいた稲わらが、田んぼいちめんへばりついている。稲わらは自然に

朽ちて、土を肥やす養分になるのだ。温かな地中では、越冬する幾多の生き物たちが、土壌を肥やしてくれる。

(中略)

初めて田んぼに入ったとき、人生は、土があまりにもふかふかなのに驚いた。「その下には、数え切れないほどの生き物が住んでるんだよ」と志乃さんが言った。

本格的な春を迎え、ばあちゃんの様子に少しずつ変化が見られるようになってきた。

「冬のあいだも生き物たち、がんばってくれてたんだ」つぼみがつぶやくと、「がんばってないよ。自然のまんま、そのまんまなだけ」と志乃さんが笑った。

田んぼの作業に連れ出せば、興味深そうにじっと人生たちをみつめているときどき、びっくりするような大声で「ああ、そうじゃないわ。違うのよ」と声を上げる。(中略)

以前、⑦志乃さんも同じような感想を口にしていたそう。そのとき、ばあちゃんいわく、自然のまんま、そのまんま。がんばらなくても、みんな一緒に生きてるのよ。私たち、繋が<sup>つな</sup>がり合<sup>あ</sup>って生きてるのよ、と。

そのばあちゃんは、いまは満開の桜の下、人生が家から運んだ木製の小さな椅子にちょこんと腰かけ、苗床を作る様子を見るときもなしに眺めている。

「家の中に引きこもってないで、ばあちゃんをどんどん外に連れ出そうぜ」人生はつぼみを促した。仕事で出かけているあいだ、ふたりが家にこもりつ切りになっているのが、どうにも気になっていたのだ。

できるだけばあちゃんを農作業に連れ出したい。そう言い出したのは人生だった。

つぼみとばあちゃんが引きこもってはいけなさと心配する自分は、つい数ヶ月前まで、アパートの狭い部屋にじっと引きこもっていた。さなぎの中で、もはや目覚めることなく命尽きていく幼虫のようだった。けれど、決して好きこのんでそうしていたわけではない。

自分たちは、ばあちゃんの宝物の田んぼで、約束通り、これから米作りをする。

⑧さなぎの中の幼虫は、目覚めるタイミングを辛抱強く待っている。長い冬を過ごし、春がくれば、殻を破って透き通った羽根を広げる。そうして、

いまの状態では、ばあちゃんに指導を仰ぐわけにはいかないし、当然手を貸してもらえない。それでも、米作りのすばらしさを語り聞かせてくれたばあちゃんは、自分たちの師匠だ。自分たちの作業を、師匠に見てもらいたい。そんな気分だった。

大空へ飛び立つのだ。

現実の自分を顧みれば、田舎で暮らし、派遣社員で高齢者施設の清掃をし

ている。認知症の祖母の面倒をみながら、手作業で米作りをし、田んぼで泥まみれになっている。どこからどう見ても、カッコよくなかない。羽根を得て大空に飛び立つところか、地面にこわごとへばりついているような感じだ。都会に暮らす同世代の若者から見れば、だっせー、とひと言で切って捨てられるかもしれない。

それでも、人生は、この暮らしがたまらなく好きになっていた。

枯れ枝のようなおばあちゃんの手。右手を人生が、左手をつぼみが、それぞれにしっかりと握り、毎朝、庭へ出る。青く煙る八ヶ岳の峰を遠く眺めながら、深呼吸をする。

生きてるんだ、という言葉が、どこからともなく聞こえてくる。生きるんだ、という思いが、心の底から湧いてくる。

(中略)

「なんだかさあ。変わったよね」

人生は、つぼみのほうを向いて訊いた。

「変わったって、何が？」

つぼみは、黙って人生を指差した。人生は、「え？ おれが？」ともう一度訊いた。つぼみは、うなずいた。

「最初の頃は、超怪しい人だったけど。なんていうか……変わった。すっごく、変わったよ」

超怪しい、というところは聞かなかったことにして、「そうかなあ……どこが？」と、さらに訊いてみた。⑨つぼみは、少しはにかんだように横顔で笑

ったが、それ以上は何も言わなかった。

そっちのほうこそ、と人生は、心の中でつぶやいた。

そっちのほうこそ、変わったよ。対人恐怖症だとか言ってたけど、人と会うことから逃げなくなった。誰とでも、まっすぐ向き合うようになった。強くなった。

ちよつとだけ、おれにやさしくなった。それから、ちよつとだけ……きれいになった。

「田んぼ効果かな」

人生が言うと、

「それだけじゃないよ。おばあちゃん効果もあるよ」

ねえおばあちゃん、とつぼみは、傍らのおばあちゃんに話しかけた。おばあちゃんは、相変わらず無表情かと思いきや、なんとも気持ちのよさそうな顔で、目を閉じて、朝日を浴びているのだった。

(原田マハ『生きるぼくら』より。なお、本文には省略等がある。)

\*1 「自然の田んぼ」での米作り……「おばあちゃん」が義母から教わった米作りの仕方。亡き家族との思い出の場所として、「おばあちゃん」は「自然の田んぼ」を大切に守ってきた。しかし、認知症が進行し、「今年はまだ米作りができないかもしれない」と言っていた。

\*2 種籾……種としてまくために取っておく籾。

\*3 籾殻燻炭……真っ黒にいぶした炭。地温を上げて稲の発芽を促すために用いる。

問一 傍線①に含まれる、(1)「その」(2)「鮮やかに」(3)「実つ」の品詞を、それぞれ漢字で答えよ。

問二 傍線②「そうはいかない」とはどのようなことか。次の空欄に合うように二十五字以内で答えよ。

【二十五字以内】わけにはいかない、と云ふこと。

問三 傍線③「原則」の対義語を、次の漢字を二つ組み合わせ、熟語で答えよ。

「偽・外・序・装・秩・例」

問四 空欄④に入る言葉を、本文中から二字で抜き出せ。

問五 傍線⑤「感じ入ったように鼻を鳴らした」とあるが、ここから田端さんのどのような様子が読み取れるか。適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 田んぼ作りを商業的に成功させようとする姿勢を評価している。

イ お米の為に動植物を犠牲にしていく手法を疑問視している。

ウ 自然の生きる力にまかせていく田んぼ作りの仕方に感心している。

エ 手間のぶんだけおいしいお米ができる事実に感動している。

問六 傍線⑥「養分がたっぷり蓄えられたふかふかの土」とあるが、この内容を表す比喩を本文中から探し、七字で抜き出せ。

問七 傍線⑦「志乃さんも同じような感想を口にした」とあるが、どのような感想だと考えられるか。三十字程度で答えよ。

問八 次のア～エは、傍線⑧「さなぎの中の幼虫はく大空へ飛び立つのだ」の表現について、本文を読んだ生徒たちが考えを述べたものである。解釈として適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 「人生」が、「さなぎの中の幼虫」と自分を重ね合わせているね。「目覚めるタイミングを辛抱強く待っている」とあるように、さなぎは成長の過程で必要な状態なんだろうな。さなぎという未熟な段階の「人生」が、蓼科での大変な米作りを通して自分の殻を破っていこうと必死にもがいている。応援したくなるよね。

イ 「長い冬を過ごし」とあるけれど、冬の間も土を耕して、米作りを支えてくれる生物がいるように、「人生」の周りにも、「人生」を陰ながら支えてくれる人が多くいるよね。春になれば蝶が自分で羽根を広げるように、「人生」も、しばらくすれば誰の助けも借りず、力強く生きていけることを暗示しているといえるね。

ウ 「透き通った羽根」では、まだ殻を破ったばかりの、頼りない羽根の様子が表現されているね。人生も、まだこわこわと羽根を広げて、人

に心を開き始めたところだよ。これから大空へ飛び立ち、輝かしい生活ができるかどうかは、米作りを成功させて人からの評価を得られるかにかかっているね。「人生」の努力次第と言えるんじゃないかな。

エ 「大空へ飛び立つ」には、成長や自立、色々ながらみから解放されるイメージがあるね。「人生」は、「大空へ飛び立つ」というような素晴らしい状態まではいっていないようだけれど、ここでの暮らしをとても好きになっているよね。「人生」らしい生き方を見つけて、成長したということかな。

問九 傍線⑨「つぼみは、少しはにかんだように横顔で笑ったが、それ以上は何も言わなかった」とあるが、このときのつぼみの様子として適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 「人生」の変化を嬉しく思っているが、それを「人生」に伝えることには恥ずかしさを感じている。
- イ 「人生」の変化が何なのかわからず戸惑っているが、「人生」もわかっていないと知り、安心している。
- ウ 「人生」は大きく変化したが、自分はなかなか変わっていないことを自覚し、後ろめたさを感じている。
- エ 「人生」の変化を肯定的に捉えているが、それを「人生」自身が気づいていないことには寂しく思っている。

問十 次のア～カは、本文を読んだ生徒たちが考えを述べたものである。本文の内容に合致しているものを二つ選び、記号で答えよ。

- ア 季節の移ろいが繊細に描かれているね。その中で、人物の関係も徐々に変化しているね。最初はお互いにわだかまりを持っていた人々だけれど、厳しい冬の終わりと同時に、心のわだかまりも解けていったように感じたよ。外に出て自然に触れることは、人を生き生きとさせるなあ。
- イ 過去を回想している箇所がたくさんあったよね。「命のリサイクル」という本文の表現にもあるように、過去・現在・未来が、一つの循環として捉えられているね。過去の見方を変えることで、未来はいくらでも変えられるということ伝えようとしているんじゃないかな。
- ウ 「人生」だけの視点ではなく、他の登場人物の視点で描かれているところに注目したよ。様々な価値観に触れていく中で、「人生」が成長していく様子が、米の成長と重ね合わされていたよね。手がかかる「人生」だけれど、大きな人物に成長していくのを暗示させるよね。
- エ 動植物にもたくさん擬人法が使われているよね。様々なものが「生きている」と感じさせられる文章だったよ。その「生きている」ものがお互いに働きかけあって、それぞれの「生」を、より、その人・そのものらしくしていつている気がしたよ。
- オ 「人生」とつぼみは、二人ともそれぞれに人と向き合うことができなかった時期があったことが読み取れるね。それが米作りを始めた今では、二人に変化が見られる。「みんな一緒に、繋がって生きていく」とい

う「ばあちゃん」の言葉や「ばあちゃん」の存在が、二人を人や自分自身と向き合い、ありのままを受け入れられるようにしたんだろうね。

カ 「人生」の心に響いたフレーズとして「生きるばかり」という言葉があげられているね。「米作りは生きてる証し」って田端さんが言っていたけれど、今では珍しい日本の伝統的な米作りを通して、「人生」やつぼみが自分の生を取り戻していく様子が、臨場感ある表現で書かれていたよね。これからも伝統は大事にしていくべきだね。

□ 次の文章は、十七世紀のオランダの哲学者スピノザの著書『エチカ』について書かれたものである。スピノザは「人がより善く生きるためにはどうしたらよいか」を常に目指し、独自の考えを展開している。これを読んで、後の問いに答えよ。

話は「完全」と「不完全」という概念<sup>\*</sup>の分析から始まります。私たちはこれらの言葉を日常的に使っています。たとえば建築途中の家を見ると不完全だ、つまり、完成していないと口にする。では、なぜそれを不完全と呼ぶかというと、私たちが完成された家についての一般的観念を持っていて、それと比較しているからです。「まだ屋根がついていないから完成していない」という具合です。

完全／不完全は人間が作るものだけでなく、しばしば、自然界のものについても言われます。たとえば牛という動物について、牛の一般的観念と一致すれば、私たちはそれを **a** といい、そうでなければ **b** という。角が二本あれば **a** だけれど、一本だから **b** だ——という具合です。

しかしこの一般的観念というのは実際には偏見のことです。これまで何度も見たものに基づいて作られた観念にすぎないからです。それぞれの個体はただ一つの個体として存在しているにすぎません。

①そのことを指摘したスピノザは、すべての個体はそれぞれに完全なのだと言います。存在しているあらゆる個体は、それぞれがそれ自体の完全性を備えている。自然の中のある個体が不完全と言われるのは、単に人間が自分



の持つ一般的観念、つまり「この個体はこうあるべきだ」という偏見と比較しているからであって、それぞれはそれぞれに完全なものとしてただ存在しているのである。

(中略)

善悪の話が始まるのはここからです。自然界に完全／不完全の区別が存在しないように、自然界にはそれ自体として善いものとか、それ自体として悪いものは存在しないとスピノザは言います。印象的な一節を引用してみましょう。

善および悪に関して言えば、それらもまた、事物がそれ自体で見られる限り、事物における何の積極的なものも表示せず、思惟の様態、すなわち我々が事物を相互に比較することによって形成する概念、にほかならない。なぜなら、②同一事物が同時に善および悪ならびに善悪いずれにも属さない中間物でもありうるからである。例えば、音楽は憂鬱の人には善く、悲傷の人には悪く、聾者には善くも悪くもない。

『エチカ』第四部序言

「思惟の様態」というすこし難しい言い回しが出ていますが、ここでは飛ばして読んでください。前半は自然界に善悪が存在しないことを述べています。事物は「それ自体で見られる限り」、善いとか悪いとかは言えない。つまり、それ自体として善いものとか、それ自体として悪いものは存在しない。それ

は自然界に完全／不完全の区別がないのと同じです。

興味深いのはその理由を示す後半部です。完全／不完全の考えは、我々が形成する一般的観念との比較によってもたらされるのでした。では、自然界には存在しない善悪の考えが私たちのもとにもたらされるのはどのようにしてでしょうか。スピノザはここで、組み合わせとしての善悪という考え方を提案します。例として取り上げられているのは音楽です。

「憂鬱の人」、つまり落ち込んでいる人と音楽が組み合わせされると、その人には力が湧いてきます。その意味で落ち込んでいる人にとって音楽は善いものです。「悲傷の人」というのは、たとえば亡き人を悼んでいる状態にある人のことです。そのような人にとっては、音は悲しみにAヒタルにあたって邪魔であるかもしれません。そのような意味でその人にとって音楽は悪い。「聾者」、つまり耳が不自由な人には、音楽は善くも悪くもありません。

音楽それ自体は善くも悪くもない。ただそれは組み合わせによって善くも悪くもなる。つまり、自然界にはそれ自体として善いものや悪いものはないけれども、うまく組み合わせるものとうまく組み合わせられないものが存在する。それが善悪の起源だとスピノザは考えているわけです。

(中略) スピノザは以上を踏まえた上で、これらの言葉を再定義して使い続けることにしようと提案します。

理由は別に難しいことはありません。③いまスピノザが考えようとしているのは、いかに生きるべきかという問いです。この倫理的問いに答えるためには、望ましい生き方と望ましくない生き方を区別することが必要です。

もし完全も不完全もないし、善も悪もないというだけだったら、どんな生き方をしていても変わりないということになってしまいます。ですから、世間一般でのこれらの言葉の用いられ方を一度批判的にBケントウトウした上で、やはり善い生き方、悪い生き方を考えなければならぬと提案しているわけです。少し別の言い方をすると、もし善いとか悪いとか言うのであれば、どのような意味で言うべきかを提案しているのです。

では何が善くて何が悪いのでしょうか。スピノザはあくまでも組み合わせで考え続けます。

先ほどの例に戻ってみましょう。なぜ音楽は「憂鬱の人」にとって善いのでしょうか。それは音楽が落ち込んでいる人の心を癒やし、その人が本来持っていた力を取り戻す手助けをしてくれるからでしょう。つまり力を高めてくれるからです。スピノザはこのことを「活動能力が高まる」という言い方で表現します。(中略)

我々是我々の存在の維持に役立ちあるいは妨げるもの「…」、言い換えれば「…」我々の活動能力を増大しあるいは減少し、促進しあるいは阻害するものを善あるいは悪と呼んでいる。

『エチカ』第四部定理八証明

私にとって善いものとは、私とうまく組み合わせさせて私の「活動能力を増大」させるものです。そのことを指してスピノザは、「より小なる完全性から

より大なる完全性へと移る」とも述べます。完全性という言葉もこのような意味で使い続けようと提案しているのです。

この考え方は、言うまでもなく、自然界にはそれ自体としては善いものも悪いものも存在しないという考え方とCムジューンしません。たとえば胃が丈夫な人にとって、ステーキは元気になって活動能力を高める善い食べ物かもしれませんが、胃弱の人には、お腹が痛くなって活動能力を弱めてしまう悪しき食べ物かもしれません。すべては組み合わせであり、善い組み合わせと悪い組み合わせがあるだけです。

ここからもう一度、いわゆる道徳とスピノザ的な倫理の違いについて考えることができるでしょう。道徳は既存の超越的な価値を個々人に強制します。そこでは個々人の差は問題になりません。

それに対しスピノザ的な倫理はあくまでも組み合わせで考えますから、個々人の差を考慮するわけこうりょです。この人にとって善いものはあの人にとっては善くないかもしれない。この人はこの勉強法でうまく知識が得られるけれども、あの人はそうではないかもしれない。そのように個別具体的に考えることをスピノザの倫理は求めます。

個別具体的に組み合わせを考えるとすることは、何と何がうまく組み合わせかはあらかじめ分からないということでもあります。たとえばあるトレーニングの方法が自分には合っているのかどうか。それはやってみないと分かりません。その意味で、スピノザの倫理学は実験じけんすることを求めます。どれとどれがうまく組み合わせるかを試してみるといえることです。

ももとは道徳もそのような実験に基づいていたはずです。それが忘れられて結果だけが残っているのです。ですから、道徳だから拒否すべきだということにはなりません。ただ、個々人のDサイや状況を考慮に入れずに強制される必要があるならば、注意が必要になるわけです。

④スピノザの善悪の考え方は、その感情論と直結しています。(中略)

スピノザによれば感情は喜びと悲しみの二つの方向性を持っているのですが、より大なる完全性へと移る際には、我々は喜びの感情に満たされるのだと言っています(『エチカ』第四部定理四五備考)。反対の場合は悲しみです。『エチカ』では感情が非常に細かく分析されます。愛という喜び、共感の喜びなどです。

興味深いのはむしろ悲しみの感情の分析の方で、たとえば、ねたみの分析などは実に見事です。スピノザは「何びとも自分と同等でない者をその徳ゆえにねたみはしない」と言います(『エチカ』第三部定理五五系)。鳥が空を飛んでいるのを見ても私たちは「なんであいつらだけ飛べるんだ! ずるい!」などとは思いません。鳥は自分たちと同等だとは思っていないからです。

しかし、自分が同等だと思っていたクラスメートが優遇されたり、自分よりも高い能力を示したりすると、とたんに私たちはねたみの感情にEオソワれます。同等だと思いがゆえにねたむのです。「なんであいつだけ……」というわけです。スピノザによれば、ねたみは憎しみそのものであり、したがって悲しみの感情です。そうやってねたんでいる時、私たちはより小なる完全

性へと向かいつつあり、活動能力を低下させていることとなります。つまり自分の持っている力を十分に発揮できない状態です。自分の外側にある原因(ねたみの対象)に自分が強く突き動かされてしまっているわけですから、自分の力を十分に発揮できない、つまり活動能力が低下しているのです。

(國分功一郎『エチカ スピノザ「自由」に生きるとは何か』より)

なお、本文には省略等がある。

\* 概念……ある物事についての大まかな知識や内容のこと。

問一 空欄 a・b にあてはまる言葉を、本文中からそれぞれ抜き出せ。

問二 傍線①「そのこと」とあるが、それはどのようなことか。本文中の言葉を使って、空欄に合うように二十五字以内でまとめよ。

【二十五字以内】と書くこと。

問三 傍線②「同一事物がく中間物でもありうる」とあるが、スピノザが「善

悪」に対してこのように考えるのはなぜか。次の文の空欄に合うように、

本文中の言葉を使って、二十五字程度でまとめよ。

スピノザは、事物には【二十五字程度】と考えているから。

問四 傍線③「いますピノザがく必要です」とあるが、「望ましい生き方と望ましくない生き方を区別する」ために、スピノザはどのようなことを求めているか。適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア より善い生き方をするためには、個々人を大切にする方法を考えることこそ重要であり、道徳などは拒否しなければならない。

イ 善い生き方かどうかは、実際に活動してみないとわからないものなので、よい結果をたくさん残すことに専念して行動するのがよい。

ウ 生き方の善悪を考えるには、その人にとって何が善いものなのかを個別具体的に考え、個々人の差を考慮して決めるのがよい。

エ 善い生き方というものなど元来存在しないので、自分の考えで善悪を決め、悪いものを排除することに努めなければならない。

問五 傍線④「スピノザの善悪の考え方は、その感情論と直結しています」について、次の各問いに答えよ。

(1) スピノザは「悲しみ」の感情によって、私たちがどのような状態になっていると考えているか。次の文の空欄に合うように、本文中からそれぞれ指定の字数で抜き出せ。

私たちが悲しみの感情にとらわれている時には、私たちは【 1 八  
字 【へと向かいつつあり、活動能力が【 2 二字 【している状態であると考えている。

(2) これに対して、スピノザは「その感情論と直結」させることで、私たち

がどのような状態になれば「より善く生きること」につながると考えているか。次の文の空欄に合うように、本文中の言葉を使って、それぞれ指定の字数でまとめよ。

スピノザは、私たちが【 1 五字 】に満たされると時には、【 2 三十  
字程度 【状態へと向かうため、より善く生きることにつながると考えている。

問六 波線A「ヒタ(る)」・B「セントウ」・C「ムジュン」・D「サイ」・E「オソ(われる)」のカタカナを漢字に直せ。

三 次の『徒然草』に関する文章を読んで、後の問いに答えよ。

A 友とするに悪き者、七つあり。一つには、高く、やんごとなき人。二つには、若き人。三つには、病なく、身強き人。四つには、酒を好む人。五つには、たけく、勇める兵。六つには、虚言する人。七つには、欲深き人。

友とするのによくない者が、七つある。一つには、身分の高い人。二つには、若い人。三つには、無病で身体の強い人。四つには、酒を飲む人。五つには、勇猛な武士。六つには、嘘をつく人。七つには、欲深い人。

(第一一七段)

①「嘘をつく人」と「欲深い人」はわかる。騙されたくはないし、たかられたくもない。

「酒を飲む人」も、わからなくはない。下戸は上戸とはつき合いつらい。私は飲めるクチであるが、それでも御免蒙りたい酒飲みはいる。酔って絡まれたり愚痴られたりしては煩わしい。まして、吐いた世話など毎度させられては敵わない。

しかし、ほかの四つは、どうして友にしてはいけないのか、よくわからない。逆に、多くの人が友として好むタイプではないか。

「上流階級」の友人がいれば、ふだん口でできない高級料理を味わえるし、お目にかかれない著名人に紹介してもらえ、まともには取れないチケットなども簡単に入手してくれる。いやいや、それではこちらが嫌われ者の

②「友」になつてしまいが、そういう実利を除いても、ハイソな空気を吸うことで自分のステータスが上がるのはよいことではないか。

「若い人」は、総じて爽やかで屈託がない。くたびれた「おっさん」や、かましい「おばはん」よりも、ずっと好感度が高いだろうに。

最も解せないのは、「頑強な健康体」を友として選ぶという点である。年中「あつちが痛い」の「こつちが調子悪い」のとぐずぐずされるよりも、よほど面倒のない相手である。

「勇猛な武士」は、兼好の生きた中世においては、尊敬されるべき職種である。いまや武士の時代ではないので、勇猛さで置き換えるなら、さしずめ格闘家であろうか。物騒な世の中だから、ひとりくらい屈強の勇士を友としておくのは安心この上ない。

一般には、むしろ問題がないと目される人々なのに、一体なぜ？  
そこで、別の章段に、兼好の求める友人像を探してみた。

B 同じ心ならんとしめやかに物語して、③をかき事も、世のはかなき事も、うらなく言ひ慰まんこそうれしかるべきに、さる人あるまじければ、つゆ違はざらんと向ひぬたらんは、ひとりある心地やせん。

同じ心をもっているような人としんみり物語して、③ ことでも、つまらない世間話でも、心の隔てなく言い慰め合えるところなら、それこそうれしに違いないのだが、そんな人はいるはずもないから、ちょっとでも相手の

気持ちに逆らわないようにと思いつながら向かい合って座っているとしたり、ひとりである気がするではないか。

(第一二段)

兼好の友人関係のキーワードは、「④同じ心」にあるようだ。「相手に逆らわないように」と気兼ねしたのでは、たしかに友情は生まれにくい。心の通う対話の妙味がないなら、ふたりでいてもひとりであるのと同じような空虚な心持ちになるだろう。

そういう眼で先のワースト7を見ると、ひとつの共通点が浮かび上がる。

これらはすべて、こちらが「⑤相手」なのだ。

「身分の高い人」とつき合うには、失礼のないように畏まらねばならない。自分よりも「若い人」を相手にすると、言動や思考、パターンの違いに気を遣う。

「病知らずの健康体」も「酒を飲む人」も、歩調を合わせて行動をとるとすると、心身ともにくたびれる。「勇猛な人」は、敵にまわすと怖いから、言葉を選んでつき合うことになる。もしくは、真の味方と見込まれて、正義感につき合わされ、危険な闘争に巻き込まれるかもしれない。「嘘をつく人」は、信用すべきかすまいか絶えず気を惑わされるし、「欲深い人」の欲望に応えるのはたいそう負担である。

言い換えれば、これらの人はみな「抑制の利かない自己中心的な人」だといえる。あるいは、「弱者に対する配慮のない人」といつてもよい。

だからといって、兼好は献身的な優しさを求めているわけではない。それでは逆に、相手に忍従を強いることになるわけで、相手から見ればこちらが「自己中心的な人」になってしまう。だから、「同じ心の人」と彼はいうので

ある。「立場が対等」だとか「意見がまったく同じ」などという表面的な意味合いではなく、気配りや教養や誠実さの点で、つまりは「価値観のレベルでの一致」を求めているということだろう。

逆にいうと、⑥意見の食い違いがあつた場合は、気兼ねなく真摯に向き合つて話し合えなくてはならない。それを互いに喜び合せてこそ、「同じ心」をもっているといえる。

「C」 「たがひに言はんほどの事をば、「げに」と聞かひあるものから、いささか違ふ所もあらんこそ、「我はさやは思ふ」など争ひ憎み、「さるから、さぞ」ともつち語らば、つれづれ慰まめと思へど、げには、少しかこつ方も我と等しからざらん人は、大方のよしなし事はんほどこそあらめ、まめやかな心の友には、はるかに隔たる所のありぬべきぞ、わびしまや。

双方が互いにいいたいと思つている程度のこととは、「なるほど」と聞いているのも価値はあるけれど、少しは食い違ふところもあるような人のほうが、「自分はそうは思わない」などと本気で論争し、「そういう理屈でいくと、そういう結論になるのだ」などと語り合えるなら、所在ない心の寂しさも慰まらうと思つけれど、実際のところ、少し感じている不満といった方面の話でも、自分と同等の価値基準をもっていない相手では、通りいっぺんのつまらないことをいう程度ならよいだろうが、真の心の友というには、はるかに隔たつたところがきつとあるだろうと思つと、やりきれない気持ちである。

(第一二段)

議論であれ、愚痴であれ、腹蔵なく語り合える「真の友」。しかし、現実には、このような関係になれる人はめったにいない。

いないけれども、「まあまあ、この程度でお互いによしとしよう」という暗黙の妥協によって、多くの友情関係は成り立っている。あまりに突き詰めた諦観は、われわれ俗人には耐えがたい。だから、多少のことは目をつぶる。  
しかし、兼好は、この続きの章段に、

**D** ひとり、燈のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、**ここ**よなう慰むわざなる。

ただひとり灯火の下で書物をひろげて、見も知らぬ昔の人を友とするのは、この上もなく心慰むことである。  
(第一三段)

と、述べている。「遠い昔の文人」の奥行きの高さに敵う「現実の友」などいない、ということか。⑦兼好の孤独な境地が、ゆるやかで静かな語調のなかに揺らめいて見える。

(荻野文子『へたな人生論より徒然草』より)

徒然草原文は安良岡康作『徒然草全注釈 上巻』より引用)

\*1 下戸・上戸……下戸は酒が飲めない人、上戸は酒を多く飲む人のことをいう。

\*2 ハイソ……上流階級に属しているさま。またそのように見える雰囲気。

\*3 妙味……文章などの非常にすぐれた趣。何ともいえない味わい。

\*4 諦観……本質をはつきりと見極めること。

問一 二重傍線「たがひに言はんほど」・「こよなう」を現代仮名遣いに直し、全て平仮名で答えよ。

問二 傍線①『嘘をつく人』と『欲深い人』はわかる」とあるが、筆者はどのようなことが「わかる」のか。次の文の空欄に当てはまる言葉を、本文中から十五字で抜き出せ。

「嘘をつく人」と「欲深い人」を「十五字」ということがわかる。

問三 空欄②に入る言葉を、**A**の現代語訳の中から五字以内で抜き出せ。

問四 傍線③「をかしき」の現代語訳として適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア くだらない
- イ めずらしい
- ウ おもしろい
- エ わからない

問五 傍線④「同じ心」とあるが、心が同じであるとはどのようなことか。三十文字以内で答えよ。

問六 空欄⑤に入る言葉として適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 気に障る
- イ 気に病む
- ウ 気を回す
- エ 気を張る

問七 傍線⑥「意見の食い違いが話し合えなくてはならない」とあるが、それはなぜか。次の文の空欄に入る言葉を、**C**の現代語訳の中から十五字で抜き出せ。

兼好が、意見の食い違いのある人と本気で話し合うことによって、  
【十五字】と考えていたから。

問八 傍線⑦「兼好の孤独な境地が揺らめいて見える」とあるが、筆者の想像する「兼好の孤独な境地」について説明した次の文の空欄に合うように、本文中の言葉を使って、それぞれ指定の字数でまとめよ。

兼好は【 1 二十五字以内】人こそが真の心の友だと考えているが、現実ではそのような関係になれる人は滅多にいないため、【 2 十五字程度】ことが唯一の慰めとなっている。

問九 『徒然草』と同じ時代に成立した作品として適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 源氏物語    イ 方丈記    ウ 竹取物語    エ 枕草子